

第15話 織田信長の入京

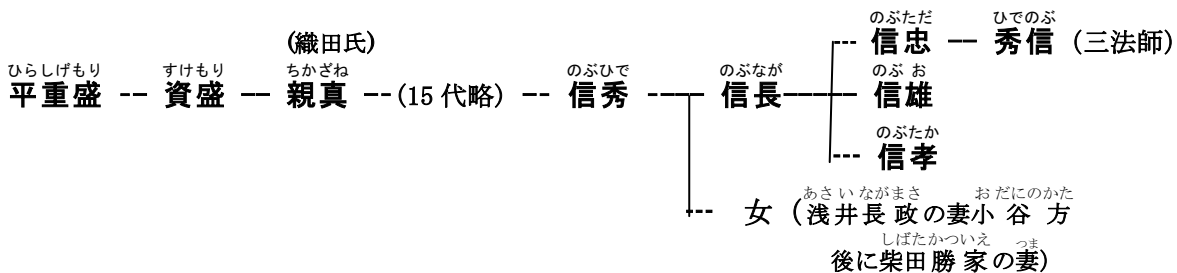
桶狭間の一戦に今川義元の大軍を破って、頓に武名をあげた織田信長が、戦国時代の英雄の理想を真っ先の実現して入京する。 信長の勤王。

戦国時代に諸国に起こった英雄の多くは、京都にのぼって天下に号令しようと望んでいたが、その地が遠く辺土に偏したり、あるいは隣国の敵と互いに相制し合ったりして、いづれもその目的を遂げることが出来ずにいました。

尾張の織田氏

ところが、織田信長が尾張から起こると、地の利を得ていたためでもあるが、1つは殊に深い勤王志を抱いていたのと、全く人にすぐれた知略をもっていたのとで、逸早く京都にのぼり、天下一統の端緒を開きました。

織田氏は平重盛から出ているといわれる。 その家は代々管領の斯波氏に仕えて尾張の守護代をしていたが、応仁の乱後、斯波氏が衰えるにつれて、しだいに勢いを得て、ついに信長の父の信秀に至って自立した。



織田信秀の勤王

織田信秀は頗る勇武で且つ知略も富んでいた。しばしば兵を近国に出して領地を広めた。又、敬神、尊王の大義をも弁え、後奈良天皇の御代に、お金を伊勢の神宮に献じて外宮の仮殿を造営し奉ったこともあれば、また、大金を朝廷に献じて御所の垣根を修理しこともあった。人心が荒みに荒んで、朝廷の御料地をも横領して憚らない者も出るような戦国時代に、尾張の小領主にしか過ぎない信秀が、この立派な勤王志を致したのを見ると、感心します。このために、後奈良天皇はわざわざ人を尾張に下して、お褒めの言葉を賜いましたが、後に、明治天皇は特に信秀に従三位を贈られた。

織田信長の生い立ち

織田信長はこの信秀の子として、後奈良天皇の天文3年に尾張の名古屋に生まれた。幼名を吉法師と言いました。生まれつき至って乱暴な、わがまま者で、決して世にいう聡明な質ではなかったようです。十六才の時に父の信秀が亡くなったので家を嗣いだが、相変わらずその行いが粗暴で、むしろ無作法ですらありました。

父の葬儀の時に、づかづかと位牌の前に進んで、いきなり香をつかんで香炉に投げ入れたという様なこと

第15話 織田信長の入京

も伝えられている。又、大勢のお供を連れて、よく大道を歩きまわったりしたが、その時の彼の身形は、見る人が呆れて目を丸くしたとも伝えられています。茶筌鬘を赤い糸や青い糸で巻き、袖をだらしなく下げ、短い半袴を穿いた腰には、火打ち袋とか、瓢箪とか、槌などをぶらぶらさせながら、疲れると人の肩に寄りかかって、大きな口をあけて餅をむしゃむしゃ食べたり、真桑瓜をかじったりしたというので、なるほど、これは一つの見ものだったでしょう。

けれども、武芸にだけは熱心で、馬術にも、槍術にも、剣術にも、弓術にも、みな凝った。その頃、一般に短い槍がはやっていたが、これは損だといって2丈もある長柄の槍を使ったり、又、刀も長い方が得だといって、朱鞘の長いのを差して、鞘の端に小さな車をつけて引きずっていたという事です。しかし、困ったことには、彼は領内の政治を一向に顧みません。織田家の老臣らは、一様に当惑の眉をひそめたが、中でも最も気を揉んだのは家臣の平手政秀でした。

平手政秀の諫め死

政秀は信長の幼時からのお守役で、信秀が亡くなる時にも、特に、信長の身の上を頼むと言われたのでした。その不行儀、無作法がますます増長するのを見ると、幾度か諫めて見たが、少しもその効果が無かったので、ついに彼は先君に対して申し訳がないと、諫めの書面を残して自殺しました。

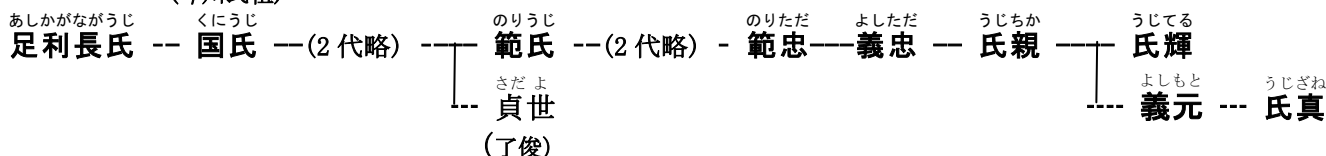
これにはさすがの信長も大いに驚き、はじめて心から後悔して、その頃の名僧といわれた澤彦和尚に命じて厚くこれを葬らせました。この時、信長は政秀の棺に手をかけて、涙を流して、日頃の不行跡を詫びたということです。天文22年のことで、この時、信長は20才でした。後に、信長は政秀の追善供養のために寺を建てて、これを政秀寺と名づけた。澤彦和尚がその開山でした。今も名古屋市の矢場町に在る政秀寺が即ちそれです。

こうして、深く政秀の忠義に感じて、後の信長は全く別人の如くになった。この年、彼は名古屋から西北約4kmの清洲城に移ったが、この時にはすでに全く心を改めて、行いをつつしんで、領内の政治にもつとめ、隣国の敵に対する用意にも心を用いるようになっていた。このために織田氏の勢いは年と共にさかんになって、ついに数年の後には、大敵今川義元を桶狭間の一戦に破って、一時に威名を四方に轟かすに至りました。

今川義元

今川氏は足利氏の1族です。代々駿河の守護職となって府中（今の静岡市）の城にいた。今川範忠が幕府の命を受けて足利成氏を鎌倉に破り、これを古河に奔らせたことや、今川義忠の頃に伊勢新九郎長氏（後の北條早雲）が一時身を寄せていたことなどは、すでに前に述べた。

(今川氏祖)



第15話 織田信長の入京

うじちか とおとうみ あわ ようや いきお よしもと さら みかわ あわ よしもと すこぶ
氏親の時に、遠江を併せて漸く勢いが強く、その子の義元に至って更に三河を併せた。義元は頗
ゆうりやく と かいどう ゆうしょう もつば うわさ
る雄略に富んでいて、そのころ街道一の勇将として専ら噂されていた。早くから京都にのぼって天下に
ごうれい こころざ ごんゆう ほうじょううじやす たけだしんげん
号令しようと志していたことは、他の群雄と同じでしたが、なにしろ、東には北條氏康、北には武田信玄
えいゆう りょうごく る す し
という英雄がいて、うっかり領国を留守になどは、それこそ、どんな事になろうとも知れなかったので、
ひさ いんにん
久しく隠忍していたのです。

今川義元の西上

えちご うえすぎけんしん
ところが、たまたま越後に上杉謙信が起こって、しきりに関東に兵を出して、北條氏を脅かしたり、
かわなかじま たいじん あらそ きかい おおぎまち えいろく
川中島に対陣して武田氏と争ったりしていたので、この機会にこそと、第106代正親町天皇の永禄3年5
みづか さいじょう と とうめん
月に、彼は自ら駿河、遠江、三河の兵45,000を率いて京都に西上の途にのぼった。先づ織田氏を当面の
てき せめ い ぞくじょう なるみ おおたか
敵として尾張に攻め入ったが、そこには、以前から今川氏の属城で、鳴海と大高との2城があって、織田
まるね わしづ とりで あいたいじ
氏の丸根と鷺津との2砦と相対持していたので、先づこの2つの砦を落とそうとした。5月18日に今
まつだいらもとやす のち とくがわいえやす
川方武将の松平元康 -- 後の徳川家康で、時に19才でした -- は丸根の砦に迫り、朝比奈泰能らは鷺津の
砦に迫った。

清洲の織田信長

きよす のぶなが
この知らせが清洲に着いたのはその日の夜でした。おり のぶなが かるう やわ
折から、織田信長は城中で家老らと夜話にふけっ
おどろ ようす だんしょう つづ かるう き
ていたが、少しも驚いた様子もなく、そのまま落ち着いて談笑を続けていた。家老らは気が気でなく、
いくさ ひょうぎ ひとこと そうだん やしき ひ と
早く軍の評議をこそ思っていたが、ついに一言の相談もなく、やがてそれぞれを屋敷に引き取らせたので、
まった あき りっぱ たいしょう ごうん すえ み ちえ かがみ くも
家老らは全く呆れて、「ふだんは立派な大将だが、いよいよ御運の末と見え、知恵の鏡も曇られたのか、
いくさ くふう き どく い あ かせ
これという軍のご工夫も出ないと見える、お気の毒のことだ」と、言い合いながら帰って行った。

のぶなが ひょうぎ なに むよう し けっしん
しかし、思うに、この時にはもう信長は、「評議も何も無用である。ただ死あるのみ」と決心していた
しょうこ みな よる あ ま あ がた
のでしょう。その証拠には、こうして皆をかえしたあとで夜の明けるのを待っていたが、やがて明け方近
さら ちゅうしん あや のぶなが あつもり
くに更に鷺津から注進があって、いよいよ鷺津も丸根も危ういと言って来ると、信長は立って、敦盛の
まい にんげん けてん うち ゆめまぼろし ごと いちどしょう う めつ か
舞の、「人間五十年、化天の内をくらぶれば、夢幻の如くなり、一度生を受け、滅せぬもののあるべき歎
く かせ いくど ま ひっし かくご しめ よろい
というところを繰り返して幾度も舞ったというのでわかります。彼はここに必死の覚悟を示して、さて鎧
き た はん はい かぶと お ふと たくま くりげ
を着て、立ちながらご飯を3杯食べて、胃の緒をしめると、肥った逞しい栗毛の馬に乗って、しづしづと
とも わづか きんしん ぞうひょう あつた
城を出た。この時のお供は、僅かに近臣が5騎とその外200余人の雑兵とだけでしたが、熱田まで12km
さん か しよぜい
の間を一散に駆けつけた時には、ほうぼうから諸勢が駆け集まって1,000騎ばかりになりました。

信長の策戦

のぶなが あつたじんぐう せんしょう いの なが
そこで、信長は熱田神宮におまいりして、戦勝を祈り、更に馬を東に進めながら、はるかに行く手を眺
くろけむり くも いっこく
めると、鷺津も、丸根も、すでに落ちたと見えて、黒煙がおびただしく雲につらなっている。それで、一刻
か なるみ へいすう しら
も早く駆けつけようと、もみにもんで鳴海の近くまで進んで行って、集まって来た兵数を調べて見ると、それ
およ くら た こぜい
でも凡そ2,000騎にはなっていた。けれども、敵の45,000に比べれば、もとよりいうにも足らない小勢で

第15話 織田信長の入京

す。これで正面からかかったのでは、もちろん たいとう たたか勿論、対等の戦いが出来るはずが無い。のぶなが信長は考えました。敵の先手の大軍をみな本道に遣りすごしてから、こちらの人数はこっそりと山の陰をまわって行って、いきなりよしもと ほんじん義元の本陣にどっと突きかかり、いっき き くづ しょうり え一気に切り崩して勝利を得ようと。

しかし、ようすいったい敵の様子はこの時どんなでしたか？

今川よしもと ほんたい ひき おけはざま ふきん義元は本隊を率いて桶狭間の附近に来た時に、丸根も驚津も、共におちい陥ったと聞いて、大いに喜んだ。先づは安心と彼は気をゆるめて、そこの山下の芝原に敷皮をしかせて、しばらく休息することにしていたところに、ふきん やしろ かんぬし しょうり よろこ いわ さけ けんじょう附近の寺や社の坊さんや神主たちが、勝利を喜ぶ祝いの酒を献上して来たので、すなわちそれでしゅくえん はじ うたい うた きょう い祝宴を始めて、謡を歌ったりして興に入っていました。



おけはざま おだのぶなが
桶狭間に馬を走らせる織田信長

おけはざま たたか 桶狭間の戦い

この様子を探って知った織田さぐ し のぶなが信長が喜んだのはいうまでもない。彼ははいよいよ決心して、ひそかに今

第 15 話 織田信長の入京

川よしもと義元の本陣をやまかげ目指して山陰から兵を進めてみると、なんとうんという運のよいことでしたでしょう！ 時は十九日の正午ごろでしたが、俄かに一天かきくもって、烈しい夕立となり、雷いんいんさえもとどろ殷々と轟き渡った。この風雨の音にまぎれて、彼の兵は全く敵にさとられずに、義元よしもとの本陣間近に迫って行った。やがて雨の晴れ間を待って、明るく霽れかかるとひとしく、どっと一斉に敵の本陣に攻め込んだ。もとより何の備えもないところですから、今川勢は全く狼狽した。初めは喧嘩か、謀反人か、裏切りかと思って、何が何やら分からぬ」まおどろまに、ただ驚いて騒いでいたが、そのうちに、織田勢の襲撃だとわかると、彼等は一層あわてた。信長のぶながは槍を執って真っ先に進んで、一気に義元よしもとの旗本はたもとに迫って行きました。

今川義元よしもとの最後さいご

時は午後 2 時ごろです、さすがに義元よしもとは無双の勇将むそうだけあって、この時までもなお少しも騒がずに諸勢しよを下知していましたが、そういううちにも、近臣きんしんらがばたばた討たれて、しだいに旗本はたもとがうすくなって来た。

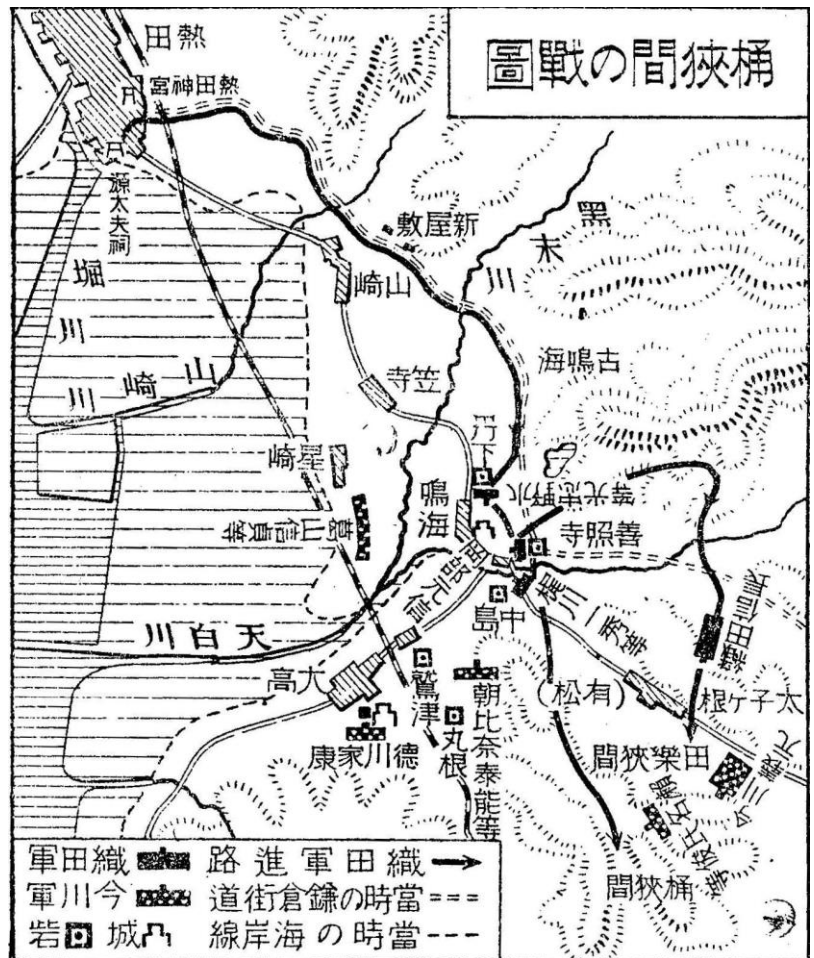
それでもなお彼は悠然として采配を揮っていると、織田方の服部小平太忠次はっとりこへいという者が、ふと彼の隙をねらって、ぐさりと槍でもって突き通した。その途端に、義元よしもとは太刀を抜いて小平太の膝口を一太刀切った。小平太こへいは尻餅をついて、起き上がることが出来ずにいると、身方の毛利新助季高もうりしんすけが、ぱっと駆けて来て、無二無三に義元よしもとに切っかけてつかってついにその首を取った。時に義元よしもとは 42 才でした。

大将がすでに討たれてしまうと、今川勢は忽ち総崩れとなった。大高城に入っていた松平元康まつだいらもとやすの如きも、部下を率いて三河に引き上げた。

織田信長のぶながは追撃はしなかった。彼は午後四時ごろには既に軍を収めて清洲を差して凱旋の途についた。

途中、熱田神宮にお礼参りをして、帰ると直ぐに大いに将士の軍功を賞したという。まことに文字通りに疾風の如き働きでした。

この時、信長のぶながは 27 才でした。かつては無作法、不行儀のために、「若様じゃ無くて馬鹿様だ」とまでいわれた彼が、小勢をもって数十倍の大軍を打ち破り、僅かに 12 時間の決戦で、海道一の勇将今川義元よしもとを見事に討ち取ったのです。



義元よしもとの子の氏真うちざねが家を嗣いだつが、暗愚あんぐで意気地いくちがなかつた。

のために、部下の将士らにも次第に愛想をつかさされた。今川氏は忽ち大いに衰えました。

徳川氏との同盟

三河の岡崎の城主松平元康もまた氏真に愛想をつかした1人でした。彼は永禄4年 -- 桶狭間の戦いの翌年 --- の春、清洲に信長を訪ねて和議を結び、この後は断然、今川氏との関係を絶って、永く織田氏の身方につくことを約束した。そして義元の諱の1字を貰ってつけた名の元康を避けて、家康と改めて、徳川氏を称することにしました。

さて、信長はこうして徳川氏との同盟が成立すると、東の方面に対する心配が全くなくなったので、兵を他方に向けてことにした。先づ第1に彼が征服しようとしたのは美濃の斉藤氏です。

美濃の斉藤氏

斉藤氏は新たにおこった家でした。もと油売りだった秀龍（髪を剃って後は道三といった）が、主家の土岐氏に取って代わって美濃を支配したのでした。今の岐阜市にある稲葉山の城に拠っていました。秀龍は、信長の父の信秀としばしば戦ったのですが、その後、織田氏との間に和議を講じて、その娘を信長の妻にして親戚になったのです。

ところが、秀龍の子の義龍が（実は元の領主の土岐頼芸の子でしたので）大いに秀龍を怨んで、弘治20月、先づ秀龍の実子である2人の弟を殺した上に、その翌3年4月には、ついに秀龍をも攻め殺した。この時、信長は舅の仇を報いる事を口実として、しばしば兵を美濃に出して義龍を討とうとしたが、いつも義龍がよく防いで、どうしても勝てなかった。

岐阜城

永禄4年5月に、（ちょうど信長と家康とが同盟を結んだばかりの時）義龍が亡くなって、その子の斉藤龍興がその後を継いだ。龍興は、父とは遥かに劣った人で、思慮分別にも乏しかったので、一向に人望が無かった。そこで、信長は、居城を小牧山に移して、兵を美濃に出し易くしてから、頻りにこれを攻めて、ついに永禄7年8月朔日、急に兵を發して稲葉山城を囲んだ。城兵はよく拒いだが、この時にはすでに斉藤氏の老臣が3人までも信長に内応していたので、とてもこれを守りきることは出来なかった。15日になって、ついに龍興は降参して出て、船で木曾川を下って伊勢の長島に赴いた。斉藤氏はここに亡びて、美濃は織田氏の手に戻りました。

そこで、信長は小牧山から居城を稲葉山に移して、その城下の市街を、これまで「井の口」と呼んでいたのを改めて「岐阜」とした。

信長、勅を拝す

織田信長の武名はますます高まった。ついに時の天皇のお耳まで達して、彼は身に余る名誉を担うことになった。その次第はこうです。---- 第106代正親町天皇は、常に朝廷の衰えを歎かれて、いかにしても天下の乱を鎮めようとの志があった。それで、はるかに信長の武名をお聞きになると、永禄10年

第15話 織田信長の入京

11月、立入宗継を使いとして岐阜に遣わしになり、ご料地の回復を仰せつけられると共に、信長を天下無双の名将とお褒めになったのです。

信長はもとより勤王の志が深かったのに、今、この優渥な勅を拝したので、どんなにかその身の光栄に感激したでしょう。彼は1日も早く天下を平定して、正親町天皇の御心を安んじようと固く決心しました。

あしかがよしあき
足利義昭

折から、幕府もまたその勢いがますます衰えていたのですが、この翌11年の7月になると、前将軍義輝の弟の義昭が岐阜に来て、助けを信長に求めた。これより先き、永禄8年の5月、第11代将軍義輝が三好、松永らの一味の者に弑され、その従兄弟の義栄が名ばかりの将軍として奉ぜられる事になったので、足利義昭は禍が身に及ぶことを恐れて近江に遁れ、先づ六角義賢に頼り、ついで越前の朝倉義景に頼って、折もあれば兄の仇をも討ち、京都をも回復しようとしていたのです。

しかし、朝倉氏にも、六角氏にも、彼を奉じて京都にのぼるほどの力はとても無かったので、義昭は失望して、久しく隠忍していたのです。それが、たまたま信長の武名が高まったために、にわかに関前から出て来て、信長の力を借りようとしたのです。

すでに勅を拝して感激していた信長は、ここに義昭の頼みを快く承けて、いよいよ京都にのぼることを企てた。それには先づ第1に、隣国の近江を平定しなければならないのです。

おうみ あさい ろっかく
近江の浅井氏と六角氏

このころ、近江は2つに分かれていました。北半は小谷（今の長浜の北方約10kmのところ）に当る。東浅井郡小谷村。）の城主浅井長政の領地であり、南半は観音寺（安土山の東南2kmのところ）に在る。蒲生郡老蘇村。）の城主六角義賢の領地でした。信長は先づ浅井氏と和して、自分の妹を長政の妻にした。これが世にいう小谷の方です。

次に、六角氏にはしばしば使いをやって、信長が京都にのぼる途を開くように求めたが、六角義賢はこれに応じようとしなかった。信長は、同年9月7日、先づ六角氏を討ってこれを平らげようと、30,000の兵を率いて岐阜を出発した。義賢は本城の観音寺城を始め、領内17ヶ所の城の防備を堅くして、これを拒ぎ止めようとした。しかし、これは何の効も無かった。第1に箕作城が落ち、第2に観音寺城が落ちて、六角義賢が逃れて甲賀の山中に隠れると、他の16の属城は風を望んで皆潰えた。

そこで、信長は義昭を奉じて、琵琶湖を渡り、大津の三井寺に陣取った。

京都で将軍義栄を擁していた三好、松永らの一味の者は、あまりに早く迫って来た織田氏の軍の堂々たる威風に恐れをなして、忽ち京都を棄てて摂津のほうに逃げ散った。将軍足利義栄は遠く四国の阿波に逃



おだのぶなが
織田信長

れた。

信長は義昭を奉じて悠々と京都に入った。時は永禄 11 年 9 月 29 日でした。実に岐阜の出発から僅かに 3 週間の後であって、その敏活な働きは、またしても文字通りに疾風の如くであったのです。

この時、先に前將軍義輝を弑した三好義継と松永久秀が降参を願い出ると、義昭はこれを殺して兄の恨みをはらそうとしたが、信長は、天下の騒乱がまだ鎮まらないのに、みだりに勢力のある者を殺すのは、徒らに人心を不安にする事になって不利だと言って、枉げて義昭に承知させて、2 人の降参を聴したということです。

足利義昭、將軍となる

越えて 10 月 8 日、將軍義榮は瘍（注：できもの）にかかって阿波で死んだ。そこで、その 18 日に、義昭は征夷大將軍に任ぜられて足利第 13 代の將軍となったが、言うまでもなく、これは全く信長のおかげですから、義昭は深くその功を徳として信長を管領にしようとした。けれども、信長はこれを辞退した。又、朝廷は彼を副將軍にしようとしたが、これも彼は固く辞退してお受けしなかった。

この時、義昭が信長に贈った感状があるが、それには、「今度、国々の兇徒らを忽ちの間に悉く退治したのは、偏に卿の武勇が天下第一のためである。おかげで足利家も再興して喜ばしい。なおこの上とも、国家の治安のことをよろしくお頼みする」という意味のことが書いてあって、その宛名は、「御父、織田弾正忠殿」となっている。この「御父」の文字を見ただけでも、いかに義昭が信長をありがたく思ったかがわかるでしょう。

又、信長は少なからぬ金子を朝廷に献上して、当座の御用にあてた上に、ご料地を横領している地方の武士どもに嚴重な令を伝えて、すぐにそれを朝廷に還納させた。こうして、京都が鎮定して、市民もみな泰平を打仰ぐようになると、彼は少しの部下を留めて京都を守らせて、自分は軍を率いて岐阜に帰った。

ところが、一方、三好、松永らの殘党は、機会があれば再挙を謀って、京都を奪い返そうとしていたので、翌永禄 12 年の正月 5 日、信長の不在に乗じて俄かに京都を襲い、義昭が住居としている本国寺を攻めた。

この知らせが岐阜に届いたのは翌 6 日でした。信長はすぐにそれぞれ救援の手筈を命じておいて、自分はその翌 7 日の払暁に、馬に鞭打って岐阜を打ち立ったが、この時のお供は、ただ 11 騎で、道々諸勢がかけつけて、程なく多勢になったという事です。桶狭間の戦いの時の清洲の出発が思い出されるではありませんか。9 日の早朝に信長は本国寺に着いた。ところが、敵はずでに全く敗れて逃げ去った後だったので、義昭に謁して、手柄のあった将士らに賞を与えたが、それにしても、こう易々と將軍の住居に攻め込む者があるようでは、今後は十分に敵に備える策を立てなければならないと、そこで彼は、義昭のために二条城を築くことにしました。

勿論、造営奉行は別に命じたが、しかもこの工事を急ぐためにも、信長は虎の皮の行臙を着け、抜刀を手にして造営所の中央に立ち、親ら工事を監督したということです。2 月 27 日に工事を始めたのが、4

第15話 織田信長の入京

月6日には早くも竣工して移転式を挙げて、その翌7日にはお祝いのお能がありました。この時、将軍義昭は自ら酌をして信長に盃を下したという。いかに彼が信長に感謝し、信頼していたかが分かります。

信長の勤皇

さて、織田信長は、二条城が殆ど落成した4月3日から、更に皇居修理の工事を始めた。けれども、このほうは、古制に則って慎重に工事を進め、二条城をとり急いだのとは反対に、苟くもまちがいをしないようにし、竣工までに要する日子を3年間ということにした。3名の者に修理奉行を命じて工事を監督させたが、これにたづさわる者は、大工や左官などの職人に至るまで、ことごとく身を清めた上、相当の礼服を着けさせた。この修理は元亀2年10月15日に至って完成したが、紫宸殿、清涼殿、内侍所、昭陽殿、その他の局々に至るまで、全く面目を改めて、立派に出来上がったので、天皇は殊の外にお喜びになり、「前代未聞の盛儀である」と仰せられたということです。

ついで、信長は、皇室日常の費用にあてるために、田地を献上しようとしたが、当時は、まだまだ不心得の者などに横領される心配があったので、これを止して、京都の市民に米を貸し付け、その利息を毎月朝廷に納めさせることにした。このために、久しく絶えていた朝廷の儀式も再び行われるようになり、諸国に逃げていた公卿らもおいおいに帰って来て、京都は漸く元の有様に立ち返った。

信長はまた伊勢神宮の造営をも思い立って、その費用の予算も立てたほどでした。しかし、これは、残念なことに、信長の存生中には、その志を達することが出来なかった。

彼が勤王敬神の志の篤かったのは、一つは織田信秀の遺志をついだものとはいえ、当時、専ら勢力を争って、その領地を広めることをのみ目的としていたような他の群雄らの、遠く及ぶことの出来なかったところでした。

(第15話 織田信長の入京 終わり。 次は前頁に戻り、16話 足利将軍の滅亡 へ)